南九州地域科学研究所所報
第27号　(2011)　35～50頁

感情表現を陶冶する効果的な音楽授業の試み

A Teaching Trial Effective in Cultivating Emotional Self-expression in Music Class

新　村　元　植（鹿児島女子短期大学）
上　野　久　美（鹿児島市立谷山小学校）

This paper presents a study into the cultivation of emotional self-expression abilities of senior high school students and elementary school pupils through including and carrying out of the music classes program arranged for this purpose. A positive and effective influence had been confirmed through a questionnaire taken among students of K-12 level at the end of the program. The questionnaire also showed a deficiency in fostering of the emotional self-expression abilities in elementary and high school education and a necessity to re-examine the contents of the music classes taught at school. Then a suitable adoption of the elementary school music classes' program had been made and tested with an emphasis on bolstering up of the pupils' emotional and verbal expression abilities. It can be said that the undertaking of ameliorative reforms in school music class program will positively contribute to the process of children's self-expression development.

Keywords : music class, cultivate, self-expression（音楽授業、陶冶、自己表現）

はじめに

欧米先進諸国では、社会生活に欠かせない自己表現能力を陶冶するためのディベート教育が児童・生徒の授業に取り入れられている。最近日本でも授業に取り入れられるようになり、児童・生徒が他者へ自己の考えを伝える力としての表現力育成が重要視されてきた。そして平成23年度から全面的に実施される新小学校学習指導要領では、平成20年１月の中央教育審議会答申を踏まえて「生きる力」の育成に加え、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること等（注１）が基本的ねらいとされている。特に思考力・判断力・表現力等の育成では、学習活動の基盤として言語に関する能力の育成が重要視されている。さらに小学校音楽科においては、学習指導要領における音楽科改訂の要点として、鑑賞領域において感じ取ったことを児童が言葉で表現すること等、従来は受動的であった鑑賞の活動を能動的で創造的な活動へ改善することが意図されている。これは、児童が感じたことを論理的に表現する能力を向上させるねらいがあると考えられ、理知的、論理的に自己の感情や考えを言語やその他の表現を介して他者へ伝える能力が重要であることを示している。諸外国においては、これらの能力育成が教育の初期段階から重要視され、様々な教育の場面で実施されている。今後世界が時間的にますます近く

なり、文化的に異なる人々とのコミュニケーション能力が必要とされるとすれば、学校現場においては、自己を表現する能力の育成を効果的に実施する授業形態はどうあるべきかを問うことが必要になってくるものと思われる。

コミュニケーション能力は教育における全段階で必要とされる能力であるが、特に教育の最終段階である高等教育におけるコミュニケーション能力に必要な言語能力の育成は、その後の社会生活に必要不可欠なものであると考える。そこで、筆者の一人である新村が指導する鹿児島女子短期大学児童教育学科「音楽Ⅰ」においては、保育に必要な音楽知識と幼児とのコミュニケーション能力の陶冶を目指している。本報では、言語能力及びコミュニケーション能力の有効性を探るために、まず鹿児島女子短期大学児童教育学科における音楽Ⅰの授業を考察し、次に、小学校音楽科授業において児童が表現する能力を自ら高めることが出来る効果的な授業法の開発を考察する。

研究方法

１．音楽授業の実施

本研究は、本学の学生を対象にして、コミュニケーション能力に必要と考えられる自己を表現する教育が小学校、中学校及び高等等学校において、どのように実施されたのかを探る。そこで、本学における音楽授業で学生にとって表現力を効果的に陶冶する授業を試みた。また、高等教育である本学における表現力の陶冶が効果的に実施されるためには、初等教育での効果的な表現力育成を目指すことが、必要と考える。そのために、小学校においてコミュニケーション能力の基礎となるべき表現力育成をねらいとする音楽授業を実践した。

２．アンケートの実施

鹿児島女子短期大学児童教育学科１年前期に履修する音楽Ⅰでは、保育に必要な基礎的音楽活動を指導する。その際に必要とされる能力が、言語を使用した幼児とのコミュニケーション能力である。これは、学生が自らの感情を幼児に伝えるために陶冶すべき重要な表現能力である。本授業では、保育に必要な音楽活動を通してこれらの能力を陶冶することをねらいの一つとしている。そこで入学後に自らのコミュニケーション能力について、児童教育学科１年生を対象にアンケート調査を実施した。〔１)～３)〕

また、鹿児島市内小学校４年生を対象にして、音楽授業実施後にアンケート調査を実施した。〔４)〕

１）ＦＤアンケートから自由記述の抽出（平成21年７月）。

２）保育に関する音楽技術アンケート（平成22年７月）。

３）コミュニケーション能力や表現力に関するアンケート（平成22年10月）。この調査では、対象学生が初等教育及び中等教育における表現活動の内容についても調査し、現在の教育環境とどのように変化しているかを探る。

４）小学校児童を対象にした音楽授業に関するアンケート（平成22年11月）。

結果及び考察

Ⅰ．鹿児島女子短期大学「音楽Ⅰ」の授業実施

１．鹿児島女子短期大学「音楽Ⅰ」の目標及びねらい

音楽Ⅰでは、基礎的音楽知識のほかに、入学当初ではあるが、保育に必要な技術として「子どもの前に立つ」、「子どもと一緒に歌う」、「ピアノ（キーボード）で幼児曲を演奏する」ことを目標としている。これは保育活動には幼児に対する音楽を使用したコミュニケーション能力が必要であることを示している。

そして、音楽Ⅰで履修したこれらの内容が、その後の実際的な保育において生かされることをねらい（願い）としている。

２．音楽Ⅰにおける授業内容の概要

音楽Ⅰは、保育士養成課程の新カリキュラムにおいて教科目「保育表現技術」の必修科目４単位に含まれる。そして本学では保育士資格・幼稚園教諭免許の必修科目であり、さらに卒業必修科目でもある。音楽Ⅰの授業内容は以下の通りである。

１）授業の目標

音楽の基礎的理論と幼児教育、初等教育に必要な音楽教育理論について演習すると共に、幼児曲の歌唱演習を通して音楽の基礎的能力を高める。

２）授業の内容

①授業の前半では２名一組のグループがそれぞれ歌唱援助者と伴奏者を担当し、模擬幼児を対象に歌唱を援助する演習を実施する。

②授業の後半では、音楽の基礎的知識や幼児に対する音楽的援助について履修する。

３）授業計画（授業の後半）

①音楽を表記する記号、ドイツ音名、音程、長音階、関係調について。

②幼児に対する音楽的援助について。

３．音楽Ⅰのアンケート調査から

１）アンケートその１

本学ＦＤの一環として平成21年度前期に実施したアンケートの自由記述欄に、学生が記述した主な内容は以下の通りであった。

・人前に出て緊張したが、発表する力を身につけることが出来た。
・幼児とコミュニケーションの取り方など、人前に出て話すことに少し慣れることが出来た。
・発表の後に評価があり、自分の欠点に気が付くことが出来た。
・自分自身に自信を持てるようになった。
・他の発表から学ぶことが多かった。

学生の大部分は、上記のように人前に出て発表することに自信をつけることが出来たと回答している。これは今までの学校教育において自分を表現する機会があまり無かったことを示していると考えられる。

２）アンケートその２

平成22年７月に実施した保育の音楽技術に関するアンケート（図１）では、ピアノや歌唱より子どもとのコミュニケーションが難しいと感じている学生が多いことが示された。音楽Ｉでは、幼児の歌唱を援助するには言葉や動作によるコミュニケーション能力が不可欠であるが、これらについて学生は難しいと感じているのである。

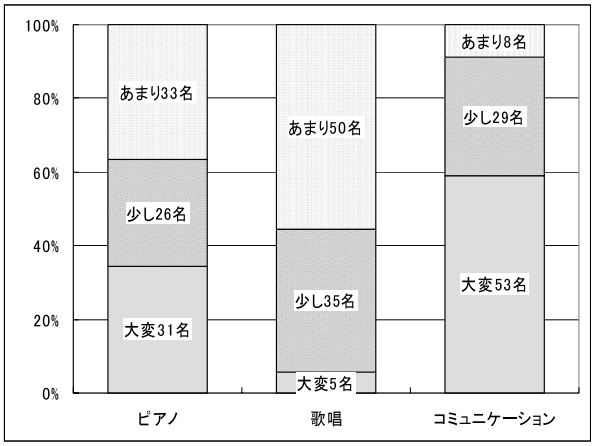

図１．音楽Ｉに関するアンケート調査（技術）94名

３）アンケートその３

児童教育学科平成22年度入学１年生248名を対象に、音楽授業を中心としたコミュニケーション能力や表現力についてのアンケート調査を、平成22年10月上旬に実施した。図２では、対象学生248名中217名が音楽Ｉの授業について、自己のコミュニケーション能力に役立つと回答している。このことは、学生が音楽１で取り扱う幼児曲を使用した幼児との歌唱演習が、幼児とのコミュニケーションを図る技術として重要視していることを示している。

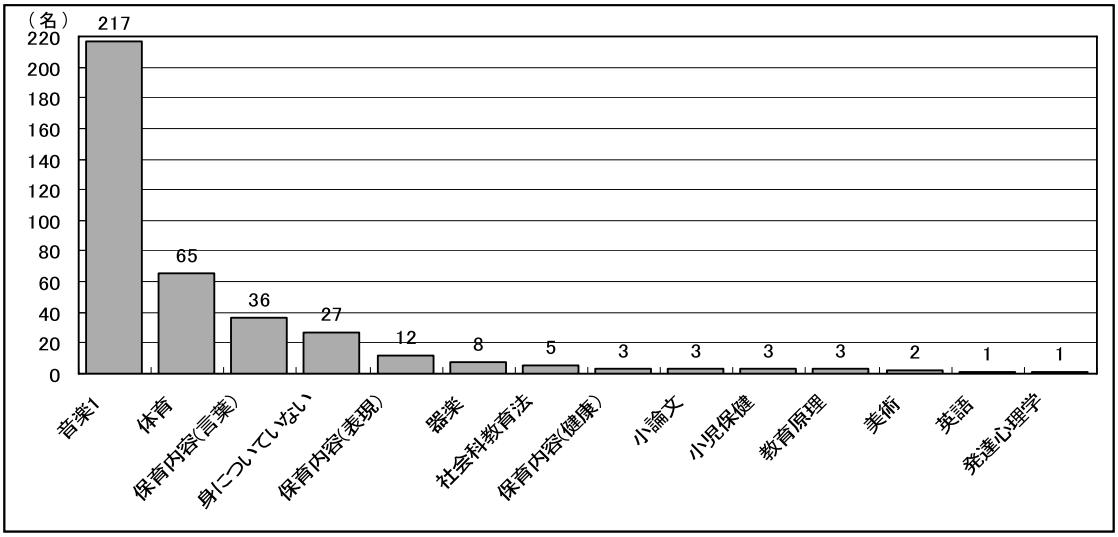

図２．どの授業でコミュニケーション能力はついたか（数字は人数）

図３では、音楽Ｉで「コミュニケーション能力が入学前より身についたか」という質問の回答において、「大変思う」･「思う」という肯定的回答が248名中210名、85％であり、音楽授業で実施している内容が学生のコミュニケーション能力育成には有効であると考えられる。

図４では、音楽Ｉの授業で「入学前と比較して言葉による表現力は身についたか」と言う質問の回答である。これにおいても「大変思う」･「思う」と答えた学生は248名中

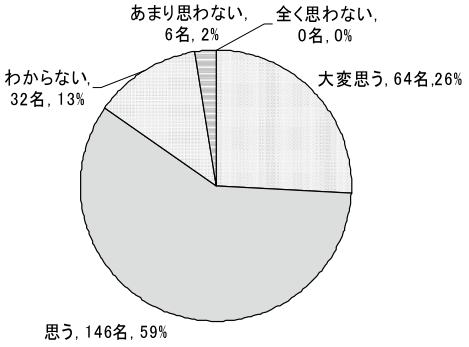

図３.「コミュニケーション能力は身についたか」に対する回答（回答総数248名）

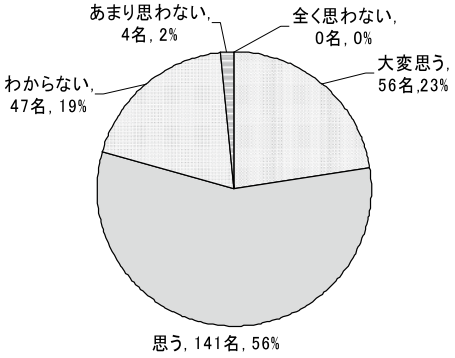

図４.「言葉による表現力は身についたか」に対する回答（回答総数248名）

197名、79%であり肯定的回答が多い。

図５では、音楽Ｉの授業で「入学前より自分の感情を表現する力身がついたか」という質問に対して248名中188名、76%が「大変思う」･「思う」という肯定的回答であった。

図６は、学生が小学校時代において自己の考えを言葉で表現し、自分の感情を何らかの方法（例えば動作や音を使用する国語・音楽・体育等）で表現する授業があったかについての回答である。これ

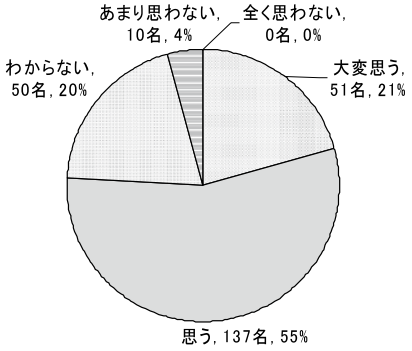

図５.「感情を表現する力は身についたか」に対する回答（回答総数248名）

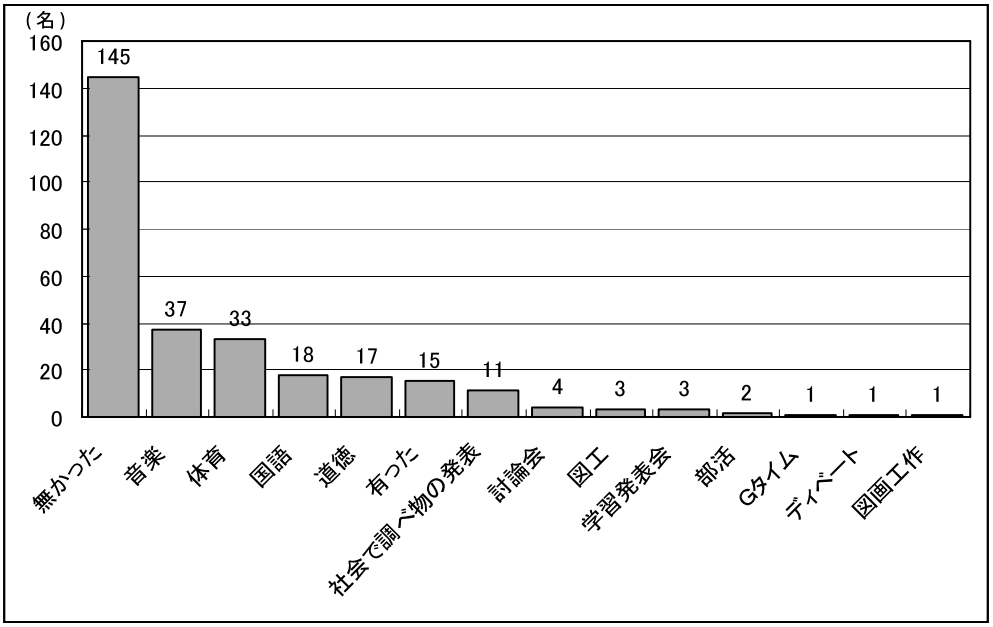

図６．小学校では自己を表現する授業があったか（複数回答あり）

によると、248名中145名（58.5％）が「無かった」と回答している。近年の小学校では積極的にディベート等のコミュニケーション能力向上をねらいとする教育が実施されているが、今回の調査では半数以上の学生が小学校時において自己を表現する経験が無かった、または希薄であったことを示している。

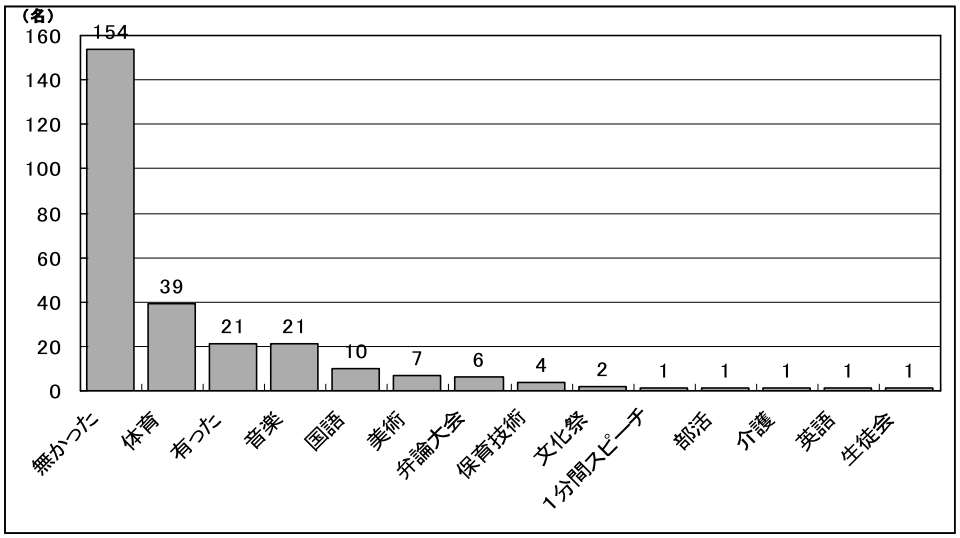

図７．中学校や高等学校での自己表現の経験（複数回答あり）

図７は学生が中学校や高等学校の授業等において、自己を表現する経験の有無を回答したが、ここでも248名中154名（62.1％）の学生が無しと回答している。これは、学生が受けてきた教育が自己を表現することより、知識を得ることが重要視された教育であったことを示している。しかし、その後の社会生活においては自己を表現出来ることこそ、重要な「生きる力」であると考えられる。

図８では、音楽Ｉで表現力育成に役立ったことについて質問した。結果は「人の前に立つこと」が248名中111名（44.8％）であり、この様な経験が入学以前にあまり無かったことを示している。このことによっても自己を表現する経験が不足していることを表している。

本学学生に対する自己表現能力に関するアンケート調査では、学生が本学の音楽授業で自己を表現し、コミュニケーションを取る技術について、内容は基本的な表現技術を指導しているにもかかわらず、７割以上の学生が進歩したと回答した。また、音楽授業で学生にとって難しいと感じたのは、ピアノ演奏や歌唱ではなく、人前でコミュニケーションを取ることであった。そして、小学校・中学校・高等学校でコミュニケーション能力や自己を表現することに関する授業が無かったと答えた学生が半数以上であった。

以上のことから、本学の音楽授業はコミュニケーション能力を陶冶するには効果的な授業であることが示された。また、アンケートから学生は、過去において自己表現に関する教育が重要視されていなかったと考えていることがわかった。しかし、ほとんどの授業やその他の特別活動で自己を表現する学習活動や特別活動は実施されていたのであ

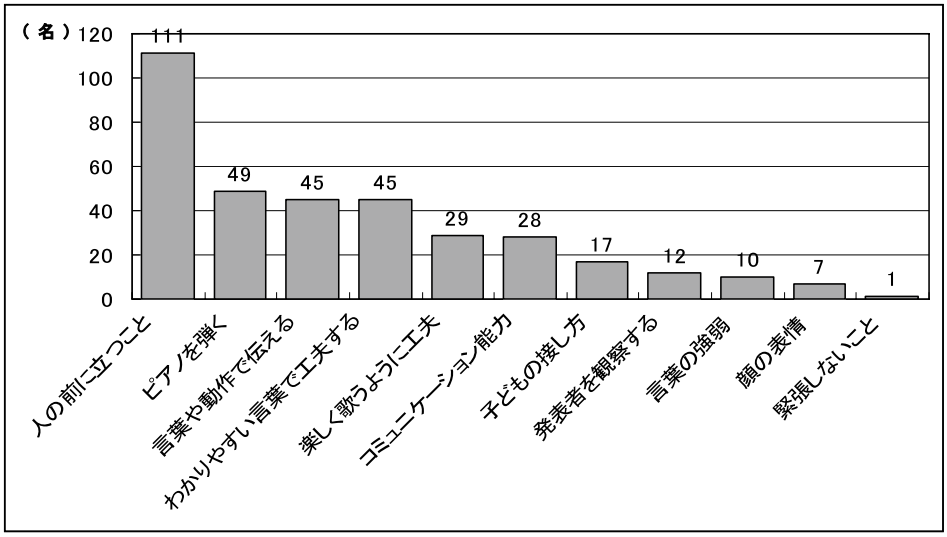

図８．音楽Ｉで表現力育成に役立ったこと（複数回答あり）

る。なぜなら初等及び中等教育では、自己表現を伴うコミュニケーションが無い教育活動は成立しないと考えられるからである。学生にとって、コミュニケーション能力に関する授業の印象が希薄だった原因については、その学習活動に参加していなかったか、もしくは、教える指導者にもこれらの能力育成の視点が希薄であり、軽視されてきたことが考えられる。

Ⅱ．鹿児島市の小学校音楽授業

１．小学校における感情表現を試みる音楽授業

本学学生の意識調査では、初等及び中等教育における表現力育成の視点が希薄であることが示された。平成23年度から完全実施される小学校新学習指導要領において必要とされているこの能力を育成するためにも、小学校における授業法の開発が必要であると考える。よって、今回は国語的教材を使用した表現能力を陶冶する小学校音楽科授業を考察する。

今回の調査対象である小学校４年生においては、国語的教材を基に言語表現からその感情を感じ取り音楽に表現する授業を試みる。これにより国語的表現からどのように音楽的表現へ移行したのかを考察し、理知的感情表現とコミュニケーション能力の効果的陶冶をねらいとした授業法の開発を目指す。

２．第４学年音楽科学習指導案

授業実施者：上野久美（谷山小学校教諭）

対象児童：谷山小学校４年生39名

授業実施日：2010年11月

１）題材「つるのおん返し」

２）題材設定の理由

児童にも親しみやすい物語である、日本の有名な昔話を題材としている。教科書巻末

には発展的な教材曲として掲載されており、物語の粗筋と歌唱曲が示されている。今回は、場面の様子や登場人物の感情をより深く感じ取ることにより、国語的表現活動と音楽的表現活動を実施することが出来ることを期待してこの題材を設定した。

３）題材のねらい

・物語を理解し、場面の様子や登場人物の感情を想像することにより言語的、音楽的表現を試みる。

・思いや意図を持って取り組んだ児童の表現活動を、言葉でのコミュニケーション活動へと導く。

４）教材

「つるのおん返し」（紙芝居）

「つるのおん返し」小学生の音楽４（教育芸術社）

５）指導の観点

・物語を理解し、児童の能力に応じた音楽的及び言語的表現活動を実施する。

６）評価規準

①関心・意欲・態度

グループで協力しながら話し合いや音楽づくりに取り組もうとする。

②音楽的表現及び言語的表現の工夫

自分の思いや意図を音や言葉で具体的に表現する。

③音楽表現の技能

グループごとに音楽をつくり、演奏する。

７）指導計画

第１次　物語を理解し、場面の様子や登場人物の感情を想像して、具体的に表現する。

第２次　言語による説明や意見交換によりコミュニケーションを図りながら、グループごとに音楽づくりに取り組み発表する。

８）授業計画　４時間

本時の目標　１／４時

・「つるのおん返し」の粗筋を理解し、表現したい場面や登場人物の感情を話し合う。

展開

分	学習活動	指導上の留意点
5	・日本の昔話について話し合う。	・日本の昔話についての知識を深めることにより、伝統的文化や生活に対して興味や関心を持つ。
5	・「つるのおん返し」の粗筋を知り、紙芝居を見る。	・粗筋を全員で音読し、物語を正確に理解する。 ・教科書の物語では不完全であることを説明し、紙芝居により物語の理解を深める。
10	・物語の表現要素抽出。	・印象に残った登場人物の感情や場面の様子を記入する。
15	・グループごとに表現したい内容を話し合う。	・表現したい場面の様子や登場人物の感情を言葉で詳しくワークシート（図. ９・10）に記入させることで、思いや意図を持って表現出来るようにする。

15	・音楽をつくっていく方法を理解し、音楽づくりに取り組む。	・音を限定したふしづくりと感情や様子を想像しながらの音色えらびについて説明し、リーダーを中心に協力しながら活動出来るようにする。
5	・数グループの発表を聴く。	・これまでに創作出来た部分を発表する。
5	・本時のまとめをし、次時の活動の見通しを持つ。	・協力や活動の様子について賞賛し、２時間でつくることを伝える。

図９．ワークシート（表）

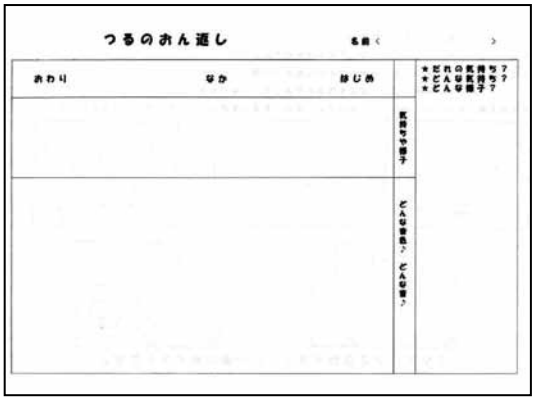

図10．ワークシート（裏）

図11．第１時授業

図12．第２時授業

本時の目標　２／４時

・表現したい様子や感情を基に音楽をつくる。

展開

分	学習活動	活動の留意点
5	・前時を振り返り本時の見通しを持つ。	・具体的な見通しが持てるようグループごとに確認する。
35	・ワークシートをもとに音楽づくりに取り組む。	・言葉で表現している気持ちや様子を基に、はじめ、なか、おわりの流れで楽器の組み合わせやふしの重なりを考えて表現出来るように助言する。

35	・数グループの中間発表を聴き互いに感想を発表する。	・イメージどおりの表現にならず活動が停滞しているグループへは個別に支援を行ったり、全体へなげかけてアドバイスをもらったりするよう促す。 ・表現したい感情や様子が伝わったかどうかという観点を大切にし、発表したグループへは達成感を持たせるようにする。
5	・本時のまとめをし、次時の活動の見通しを持つ。	・協力や活動の様子について賞賛し、次時までに完成することを伝える。

本時の目標　３／４時

・表現したい様子や感情がさらに伝わるように音楽をつくる。

展開

分	学習活動	活動の留意点
5	・前時を振り返り本時の見通しを持つ。	・具体的な見通しが持てるようグループごとに確認する。
25 10	・ワークシートをもとに音楽づくりに取り組む。 ・数グループの中間発表を聴き互いに感想を発表する。 ・中間発表をもとに自分たちの音楽をさらに練り上げる。	・音色、リズム、強弱、重なり、くり返しなどの共通事項を意識させて表現出来るようにする。 ・イメージどおりの表現にならず活動が停滞しているグループへは個別に支援を行ったり、全体へなげかけてアドバイスをもらったりするよう促す。 ・表現したい感情や様子が伝わったかどうかという観点を大切にし、発表したグループへは達成感を持たせるようにする。 ・改善したり工夫したりするところは無いか話し合い、表現を完成させる。
5	・本時のまとめをし、次時の活動の見通しを持つ。	・協力や活動の様子について賞賛し、次時は発表会であることを伝える。

図13.　第３時授業

図14.　第４時授業

本時の目標　４／４時

・つくりあげた音楽を発表し、自分たちの表現を伝える。

展開

分	学習活動	活動の留意点
5	・本時の見通しを持つ。	・どんな発表にしたいか話し合い、発表会の準備をする。
35	・自分たちの音楽を発表する。 ・互いに感想を発表し合う。	・表現したい場面や感情を言葉で説明してから、グループごとに発表するようにする。 ・表現したい音楽が伝わったか想像しながら聴くように促す。 ・良い表現の工夫や頑張っていた友達について発表させ、もう一度聴きたいグループの音楽をリクエストすることで達成感が味わえるようにしたい。
5	・本時のまとめをし互いのがんばりを賞賛し合う。	・協力の大切さや出来あがった音楽の良さを賞賛し、今後の活動への意欲へつなげたい。

９）成果と課題

音楽づくりに初めて取り組む子どもたちであるため、戸惑いや活動の停滞が予想されたが、「つるの恩返し」という物語がイメージを持って表現活動出来る効果的な題材であったために、場面の様子や登場人物の感情が想像しやすく、イラストの吹き出しへの書き込みや場面の様子の説明を子どもたちは具体的に書くことが出来た。グループ編成においては、音楽経験のある子どもを均等に割り振った等質グループになるように配慮したことが、ふしづくりを意欲的に取り組むことにつながったと考えられる。

毎時間の振り返りに協力を入れたため、協力の大切さを意識して取り組む子どもが増えた。８グループの中で、美しい布が出来上がった喜びを表現したのは２グループであり、残り６グループは去っていく悲しみや事実を知った驚きを表現していた。旋律・リズム・強弱・重なりなどを工夫するだけでなく、セリフやダンスや手拍子を入れて表現したグループもあり、子どもの感性のしなやかさには驚かされた。思いはあっても活動が停滞するグループへは、様子を詳しく言葉で表現させたり、言葉に合わせて体を一緒に動かすよう助言したり、イメージする音を言葉で表現させたりしたことが効果的であった。教師が数種類のアイデアを示し、どれが自分たちのイメージにあっているか感じながらききくらべをすることも効果的であったと考えられる。

今回の授業では、中間発表を経験しながら発表会に向かう中で、表現したい感情や様子が伝わったことに喜びや充実感を感じる子どもが増え、表現の楽しさや喜びを感じる良い機会となった。

今後の課題としては、楽器の演奏や音楽づくりに苦手意識を感じている子どもへの細やかな支援を具体的に行っていくことだと考える。

３．児童に対する授業実施後のアンケート

１）「つるのおん返し」の音楽授業は面白かったですか。

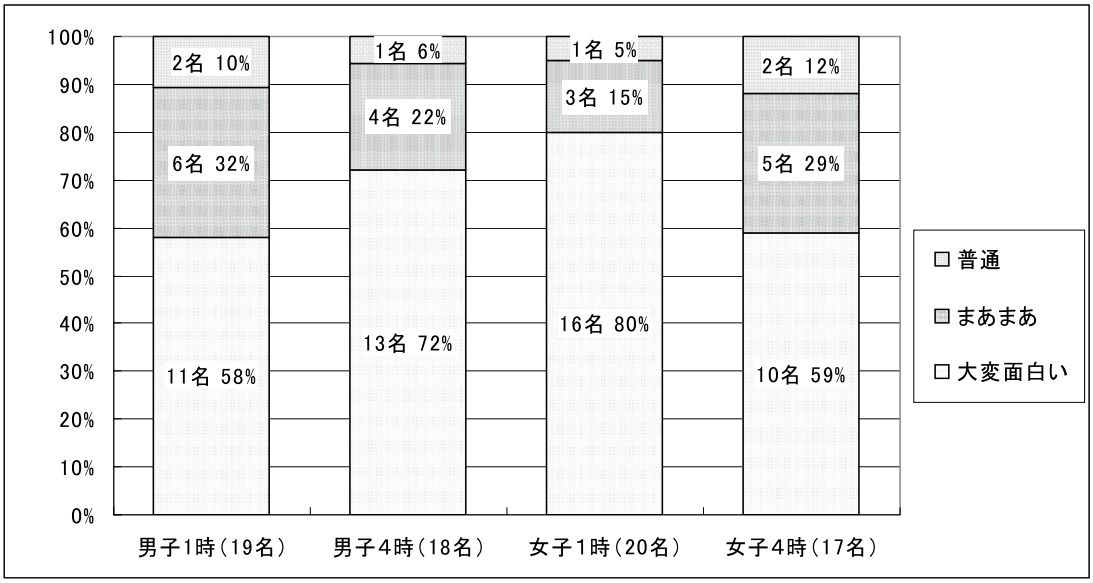

図15．授業に対する興味関心

２）「つるのおん返し」の音楽授業のどこが面白かったですか。

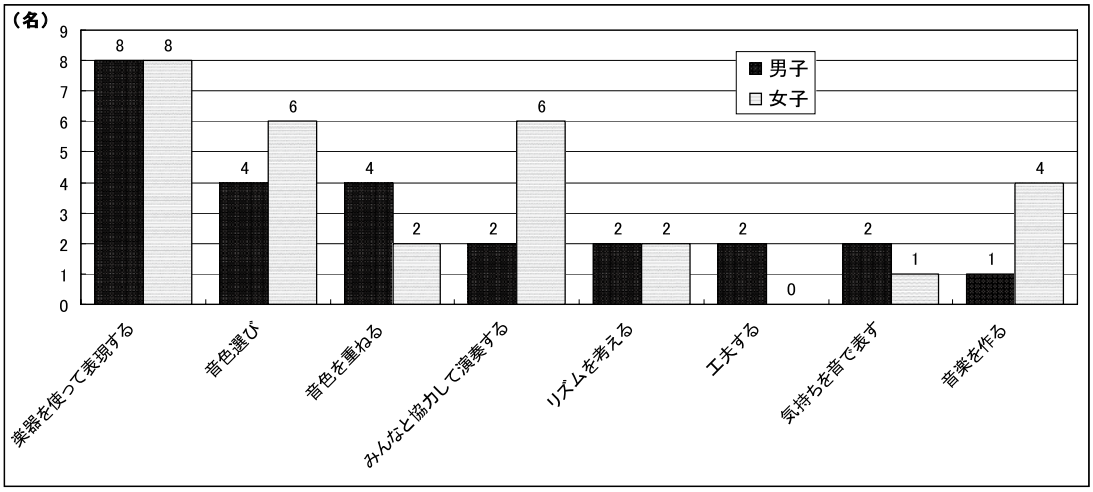

図16．授業のどこに興味や関心を持ったか

アンケートの１）及び２）では、授業に対する興味関心を調査した。図15では４年生男女児童の本主題音楽授業第１時と最終である第４時を比較した。男女児童共に「あまり」、「きらい」は０名であり面白くないと回答した児童はいない。男子児童では第１時と第４時では「大変面白い」が増加しており、興味関心が持続している。女子児童は「大変面白い」が減っており、男子児童と比較して興味関心が薄れていることが考えられる。ただし全体的にはこの音楽授業に対して、男女児童共に興味関心を持っている児童が多いことが示されている。なお、図15以後の児童数減少は第４時後のアンケート回答時に

欠席者がいるためである。

図16は第１時後の調査である。男女児童共に楽器の使用について関心があり、自ら創作することに関心を示した。特に女子児童では「みんなと協力して演奏する」や「音楽を創る」と答えた児童が男子児童より多く、創作活動についてより積極的な関心を持っている。また、実際の授業観察でも女子児童が積極的にグループ内で創作に関わる建設的意見でまとめる場面が見られた。

３）この授業で、自分の気持ちを表現することが出来ましたか。

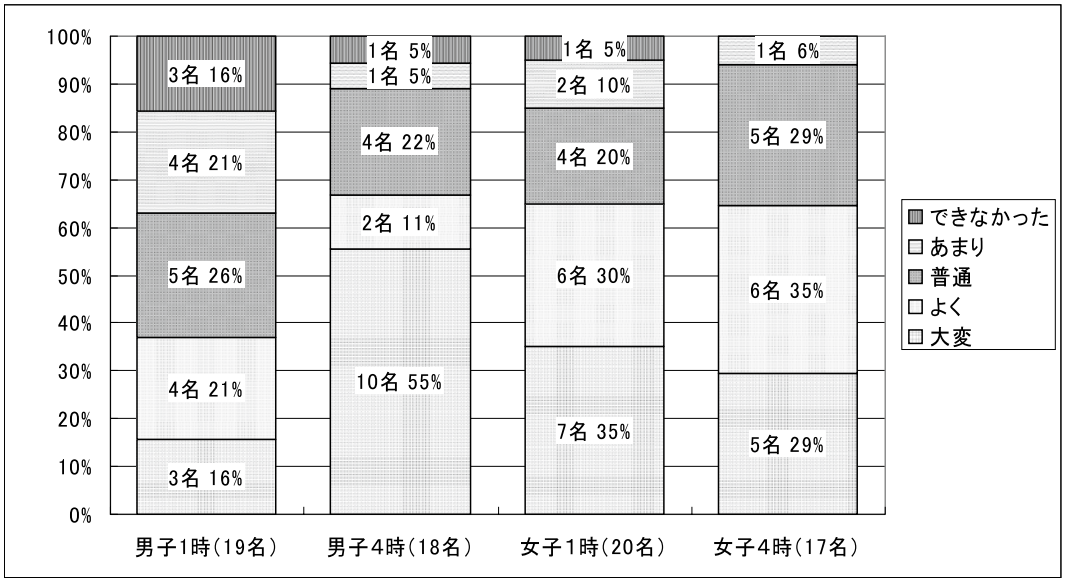

図17. 授業で自分の気持ちを表現出来たか

４）この授業で「つるのおん返し」のどこを、どんな楽器で表現しましたか。

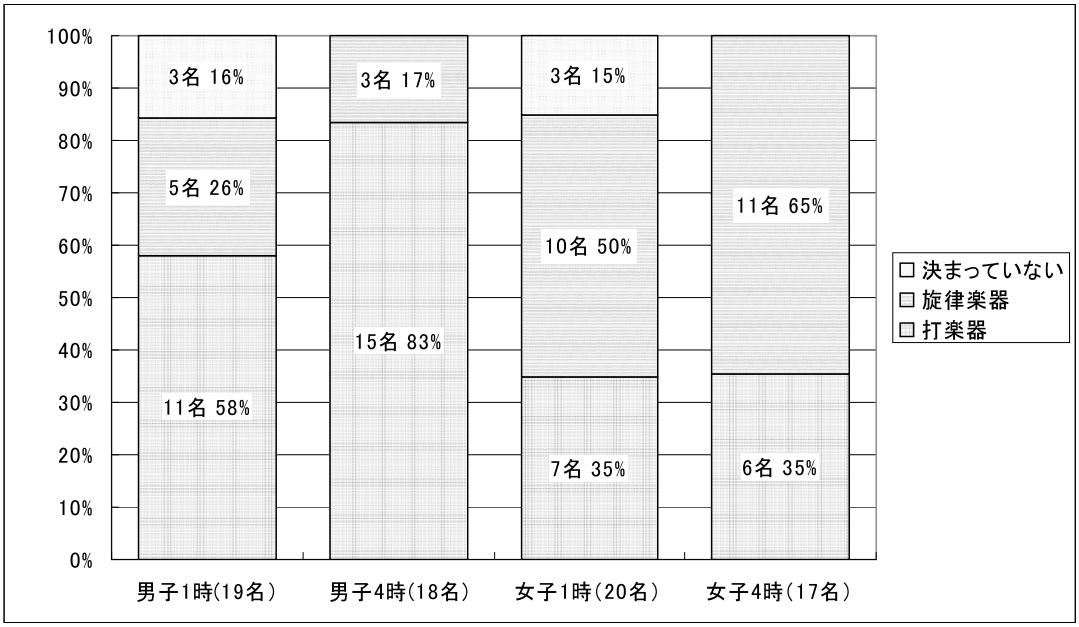

図18. どんな楽器で表現したか

アンケートの３）及び４）では、授業での音楽表現活動について調査した。図17は児童自らの表現活動に対する達成度について第１時と第４時を比較した調査であるが、男子児童では「大変」、「よく」と回答した児童が第１時では７名（37％）に対して第４時では12名（66％）であった。また、「あまり」、「出来なかった」と回答した児童は第１時では７名（37％）、第４時では２名（10％）である。本アンケートからは男子児童は本授業の表現活動に対して、第１時より第４時では達成感を持つ児童が増加していることが示された。女子児童では第１時から第４時では、「大変」、「出来なかった」がそれぞれ２名減っているが、大きな変化は無い。このことから男子児童は表現することにあまり自信が無かったが、最終的にはある程度の達成感や自信を持つことが出来たと考えられる。

図18では第１時及び第４時共に主として男子児童は打楽器に興味を示し、女子児童では旋律楽器に興味を示している。打楽器は音楽においてアクセント的使用が効果的であり、旋律楽器は創作全体にわたって使用出来ることを考えると、ここでも女子児童が主体的に創作活動に関わっているものと考えられる。

５）音楽以外の授業で、自分の気持ちを表現することが出来る授業は、ありましたか。

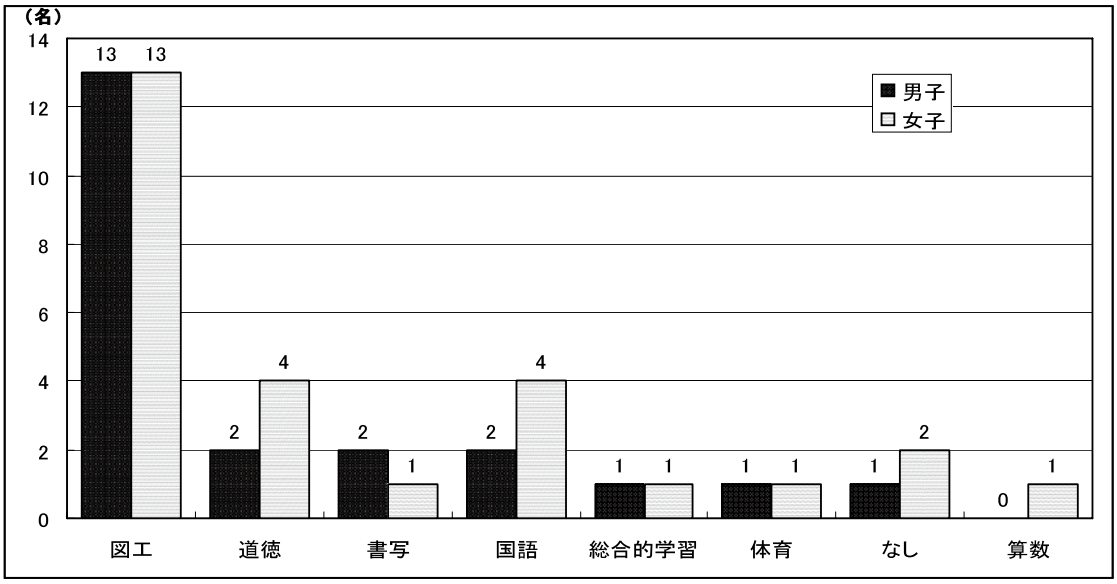

図19. 表現活動が行える授業

５）は対象児童が音楽科以外に児童自ら表現活動を行えると考えた授業について第１時後に調査した。図19では図工（図画工作）が男子児童13名（68.4％）、女子児童13名（65.0％）で最も多い、国語に関しては言語表現が主に考えられ、児童数も多いと考えたがここでは男子児童２名（10.5％）、女子児童４名（20.0％）であり、国語が児童の表現活動に対する印象は希薄であることがわかった。

以上、本学学生及び小学校児童の音楽授業では、表現力を陶冶することを考察したが、学生及び児童は音楽授業に対して肯定的な反応を示したことにより、音楽授業が自己表現力やコミュニケーション能力の陶冶に効果的であることがわかった。今後において

は、音楽的な素材を表現するだけではなく、言語表現を主にした教材を基に音楽的表現をすることにより、さらに効果的な表現力の獲得を目指すことが必要であり、それが自己表現力の習得につながる。このことが、授業対象者の感情表現を豊かにしていくことにもつながると考える。また、自己の感情を論理的に伝えることが出来ることにより、自己を他が認知しているという達成感につながるのではないかと考える。

コミュニケーション能力には、自己を表現する理性的な論理構成能力が必要であり、日本だけでなく、文化や宗教が異なる他の国の人々とコミュニケーションを取るには、これらの能力を基にした言語表現能力が必要である。将来において世界を相手にするこれからの世代には、必ず必要な基礎的能力であり、育成されるべき重要な能力であると言える。そして、指導者にとっては、新学習指導要領に盛り込まれた「言語活動の充実」を通して、より意識的に自己表現能力に基づくコミュニケーション能力の開発を目指すことが必要である。

今後においては、社会人として必要不可欠な能力である論理的自己表現能力の基礎を、初等教育の段階から陶冶することが、大変重要になっていくと考える。

今回の研究により、音楽的表現能力の陶冶は言語能力やコミュニケーション能力への影響に重要な要素であることが示された。さらに効果的な音楽授業を開発することにより、表現能力育成を目指したい。

要　約

本報では、高等教育と初等教育における表現能力を陶冶する効果的な音楽授業を実践し、アンケートを基にその効果を検証した。高等教育において、学生はコミュニケーション能力に必要な自己表現能力を陶冶するために、音楽授業が重要であると考えていることわかった。学生のアンケート調査によると小中高校では、自己表現能力に必要な教育の実施については学生の印象が希薄であり、内容についての検討が必要であることも示された。さらに、小学校における言語表現から感情表現を育成する音楽授業は、児童にとって興味関心のある授業であり、音楽授業における自己表現能力開発が期待出来ることがわかった。

注

1）文部科学省「小学校学習指導要領解説」音楽編 2008年８月

参考文献

1）新村元植「鹿児島市の公立小学校における音楽教科に関する実態及び音楽と他教科との関連性についての考察」鹿児島女子短期大学紀要　第44号　pp.157-168　2009年
2）新村元植「鹿児島市の公立小学校における音楽教科に関する実態及び音楽と他教科と

の関連性についての考察－第２報－」南九州地域科学研究所所報　第26号　pp.21-37
2010年
３）畑中良輔・小原光一・飯沼信義・浦田健次郎・黒沢吉徳・石桁冬樹・加賀清孝・教育芸術社編集部　小学生の音楽４指導書研究編　p20、pp.121-123　㈱教育芸術社
2005年
４）文部科学省「小学校学習指導要領」2008年３月
５）平成21年度埼玉県小学校教育課程説明会資料「小学校学習指導要領国語科の改訂の要点」2009年７月　http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/16874.pdf

（平成23年１月24日　受理）